

最大開閉口運動が閉口時の顎頭位に及ぼす影響

小出 勝義

論文内容の要旨

咬合のわずかな不調和でも顎関節へ過剰な負荷を加えて顎頭の偏位を生じさせる。この偏位を連続した開閉口運動は修正する可能性がある。本研究の目的は、最大開閉口運動を連続して行うことが、閉口時の顎頭位に及ぼす影響を明らかにすることである。被験者 32 名を本研究で定めた頭頸部筋群における圧痛の有無により、いずれの筋にも圧痛を認めなかった群 15 名と、いずれかの筋に圧痛を認めた群 17 名に分類した。開口量の設定は、関節結節を越える努力最大開口である大開口、関節結節を越えず被験者自身で中間と感じる中開口、中開口より小さいと感じる小開口の 3 条件とした。開閉口回数は、開閉口前の 0 回を含め、1, 2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 16, 18, 20 回の計 12 条件とした。各条件における顎頭点の三次元的位置を測定し、筋の圧痛の有無、開口量、開閉口回数による顎頭点の移動量の違いについて検討して以下の結論を得た。

1. 筋の圧痛のある群では、最大開閉口運動 10 回以上で閉口時の顎頭点は有意に前方へ移動した。
2. 筋の圧痛のない群では最大開閉口運動 10～18 回で、圧痛のある群では 4 回以上で、いずれも閉口時の顎頭点は有意に下方へ移動した。
3. 筋の圧痛のない群とある群とを比較すると、最大開閉口運動 8 回以上で、圧痛のある群がない群よりも閉口時の顎頭点は有意に下方へ移動した。
4. 中開口、小開口においては、いずれの条件間にも顎頭点の移動量に有意差は認められなかった。

以上のことから、最大開閉口運動を 10 回以上行った後に咬合の診査を行うのは臨床上有効であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、最大開閉口運動を連続して行うことが、閉口時の顎頭位に及ぼす影響を明らかにする目的で、顎頭点の三次元的位置を測定して開閉口運動と顎頭位の関連性を検討した。その結果、大開口での連続した開閉口運動は顎関節の力の解放を生じ、特に圧痛のある場合に顎頭点は漸次前下方へ移動することが明らかとなった。これらの知見より、最大開閉口運動を 10 回以上行った後に咬合の診査を行うのは臨床上有効であることが示唆された。これは、歯学に寄与するところが大きく博士（歯学）の学位に値するものと審査する。

主査 渡邊 文彦

副査 宮川 行男

副査 岩崎 信一